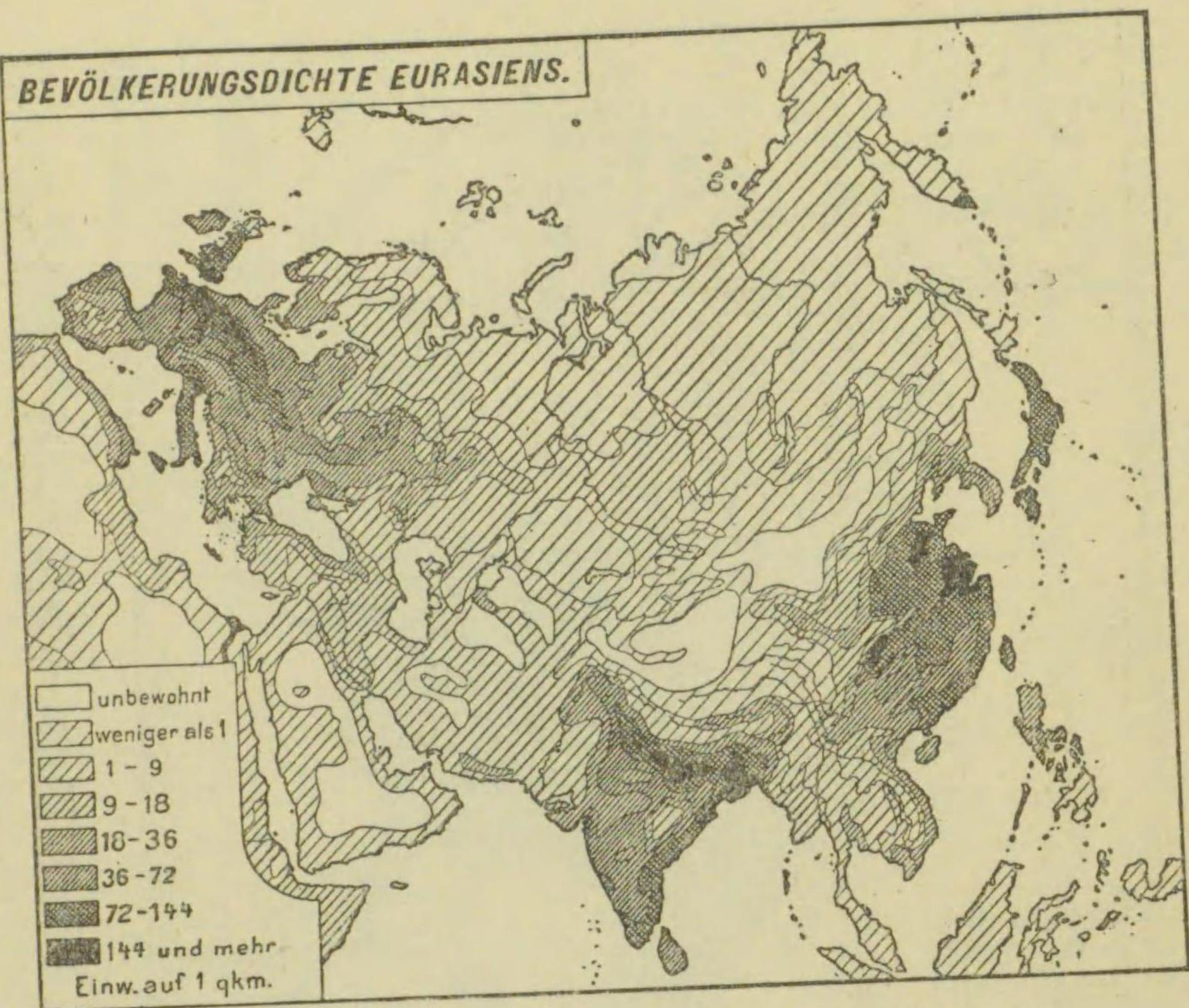


Industrie) が發達し得るのである。然し、かかる條件を具備してゐる様な場合は、今日の本來の工業經濟には餘り多く見られないのであつて、工業の分布は、寧ろ、現在は尙主として農業國でありながら、將來工業的に發達可能性が見出され得る様な地方に見られるのである。

我々は、こゝに於て、工業發達の最も重要な例證として、本來、鑛石と石炭とに基くところの所謂、重工業 (Schwerindustrie) を選ぶことにする。かくするとき、この兩者を共に産出する地域が多いか、或は工業發達の初期に於て、土地定着性が問題となるほど、兩者を産出する地域があるか、と云ふに、かかる地域は極めて少ない。勿論、あることはある。が、一般に、生産の擴大すると共に、安價な収益限界内で輸送される原料が常に高價な鑛石である限り、あらゆる工業地域に一つの變化が生じた。即ち、鑛石が動力材たる石炭の許に行くといふことで、この法則は一般に妥當してゐる。が、勿論少數の例外はある。例へば復航船が空船で歸航する代りに、非常に安い運賃で運送してくれる様な特別な場合に限つて、石炭が鑛石のもとに行くので、北アメリカ、スベリオル湖に於ける大規模な内陸港ヅルース・スベリオル (Duluth-Superior) がこの例を示してゐる。茲に於て、ウィットベックの云へることく、重工業は、動力材が安價に得らるゝ地に定着すると云ふ條理が認容さるゝのである。

更に、これらの場合を觀察しよう。それは、鑛石を有してゐる動力材の地域が、原料を外國の供給に仰ぐと云ふことで、これは、寧ろよく正規に行はれてゐることである。例へば、

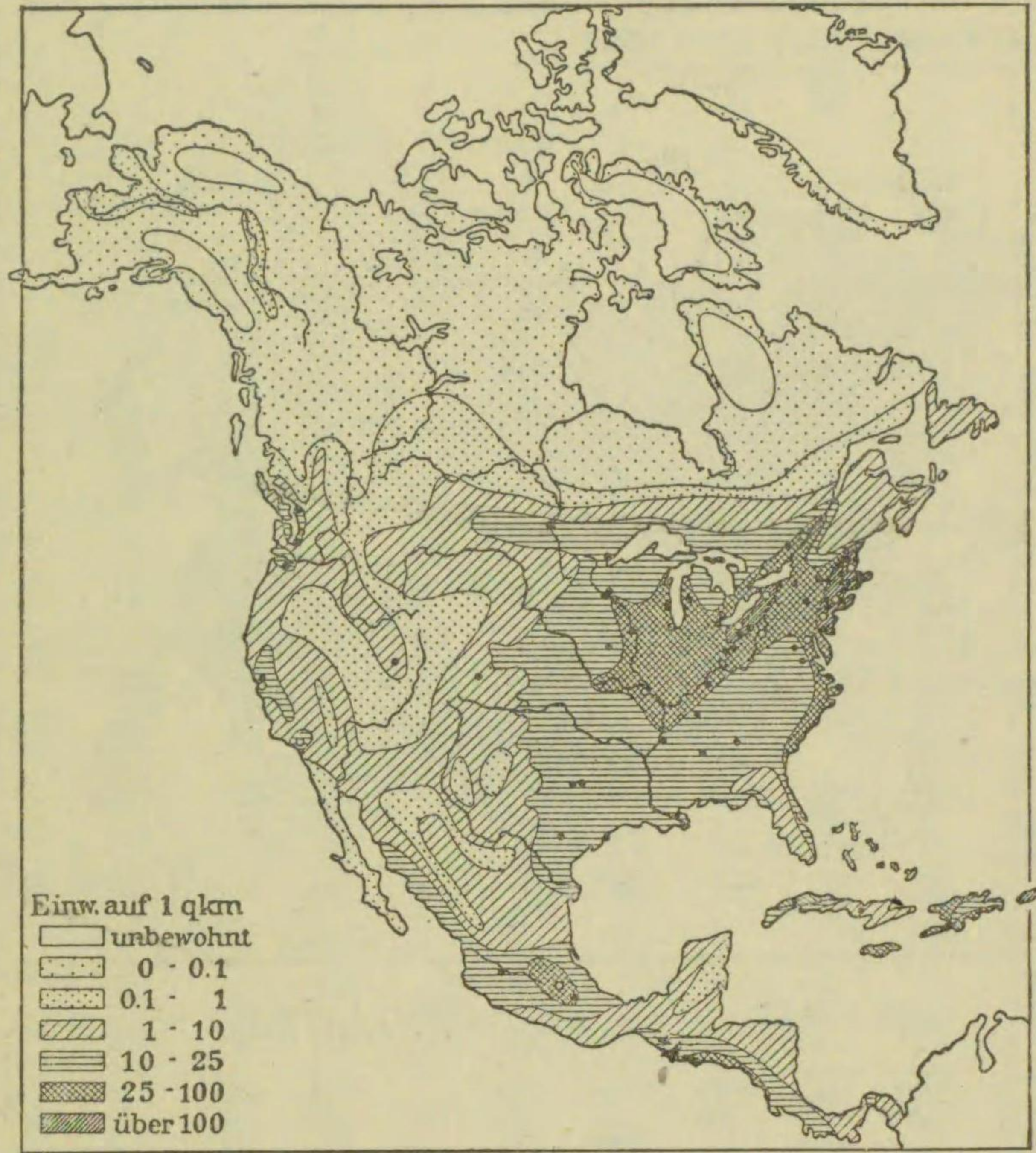


第119圖 ユーラシア大陸の人口密度

上シレジア東部の工業地域は、第一次の自給自足期間を克服して以來、瑞典、スタイアマルク (Steiermark)、ガリシヤ、ウクライナなどから鑛石を輸入したし、また獨逸西部の重工業地域であるライン・ルール地域も、豊富なロートリンゲンのミネツテ鑛床を有してゐたにも拘はらず、尙、多くの鑛石をスペイン及び米國から輸入したのである。が、ベルサイユ條約は、かかる状態を變化せしめ、今日では、ミネツテ鑛石 (Minette-Erze) は、外國

の供給と見做さねばならぬ様になつた。これと同じ様な關係は、米國の大工業地域に見らるゝ

であつて、ミネソタの鐵鑛を、ピッツブルグ、クレイブランド一帯の工業地へ輸送しなければならぬ。勿論、大湖を通過する運送距離を克服しなければならぬが、そこには多大の利益がある。即ち、それは歐羅巴では關稅障壁に依つて、収益性が、強く妨害されてゐるが、米國では動力材及び原料材がともに同一國家の空間内に所屬してゐるからである。



第120圖 北アメリカの人口密度

炭などの土地財寶を何等産出しない港市ステッチンは、たゞ、交通上の位置の理由から工業の

更に、非定着的工業の成立を考察

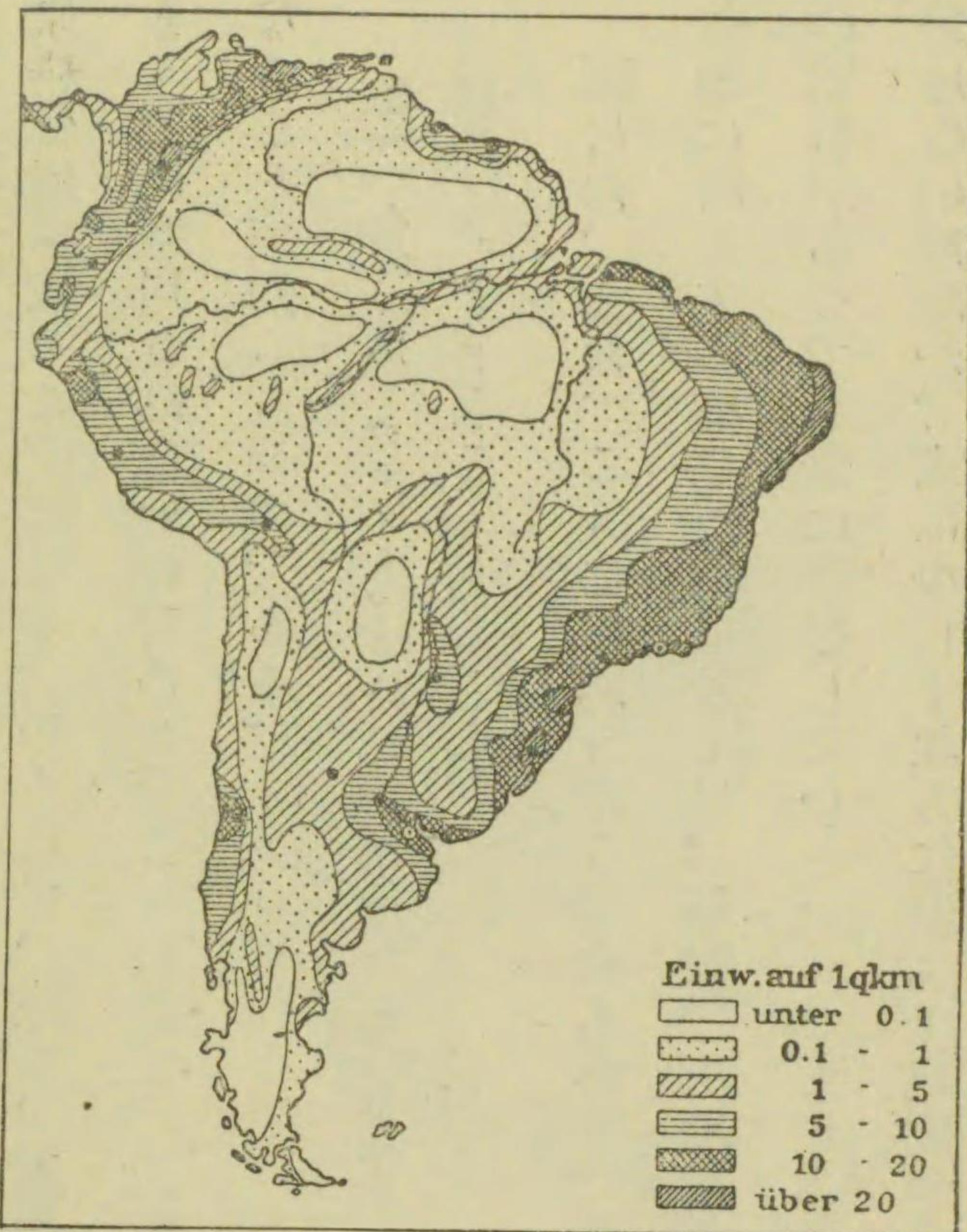
するならば、それは獨逸ステッチンの熔鑛爐にみらるゝ。蓋し、瑞典からの鑛石と上シレジアからの石炭とは、兩地方の中間位置たるステッチンで出逢ふのであつて、鑛石及び石

成立が許されてゐるのである。而かも、こゝに起つた工業は動力材の點から見ても、原料材の上から檢しても、何等、土地定着的性質を有してゐないのである。各國の港市に起つてゐる工業は、多くは、これと同じ理由に基いてゐる。かかる場合には、一般に、有利な交通位置が、原料位置に代ることになる。かくして、今日、周知のウェーバーの法則は、その原始的形態のままでは適用されないのである。こゝに於て、工業空間の成立には、交通位置が重大な要素となることが知らるゝのである。

註一 今村學郎 シオノミックス 地理學評論 第三卷昭和二年 一六四頁
註二 R. Reinhard: a. a. O., S. 133.

而した、また、こゝには恚うゆう場合もある。即ち、廣大な空間で植物的原料の栽培面積が急激に増加する様な地域に於ては、最初、土地定着的に設立された工業は、新らしい原料地域の開發があつても急に移動しないといふことがある。即ち米國の棉花紡績業は、最初、棉花栽培地帯の周縁か、或は少しく北方に沿ふて建設され、一方、その栽培地域は迅速な勢で西方に向つて發達したが、その棉花工業は、同時に西方には移動しなかつた。この不移動的理由は、工場新設の費用が、妨害要素として作用したためであつて、この妨害要素の作用の結果として

新に西方に建設された小數を除いて、米國の棉花工業は、東部に殘存して居り、原料地域だけが、西方に向つて次第に移動して行つたのである。

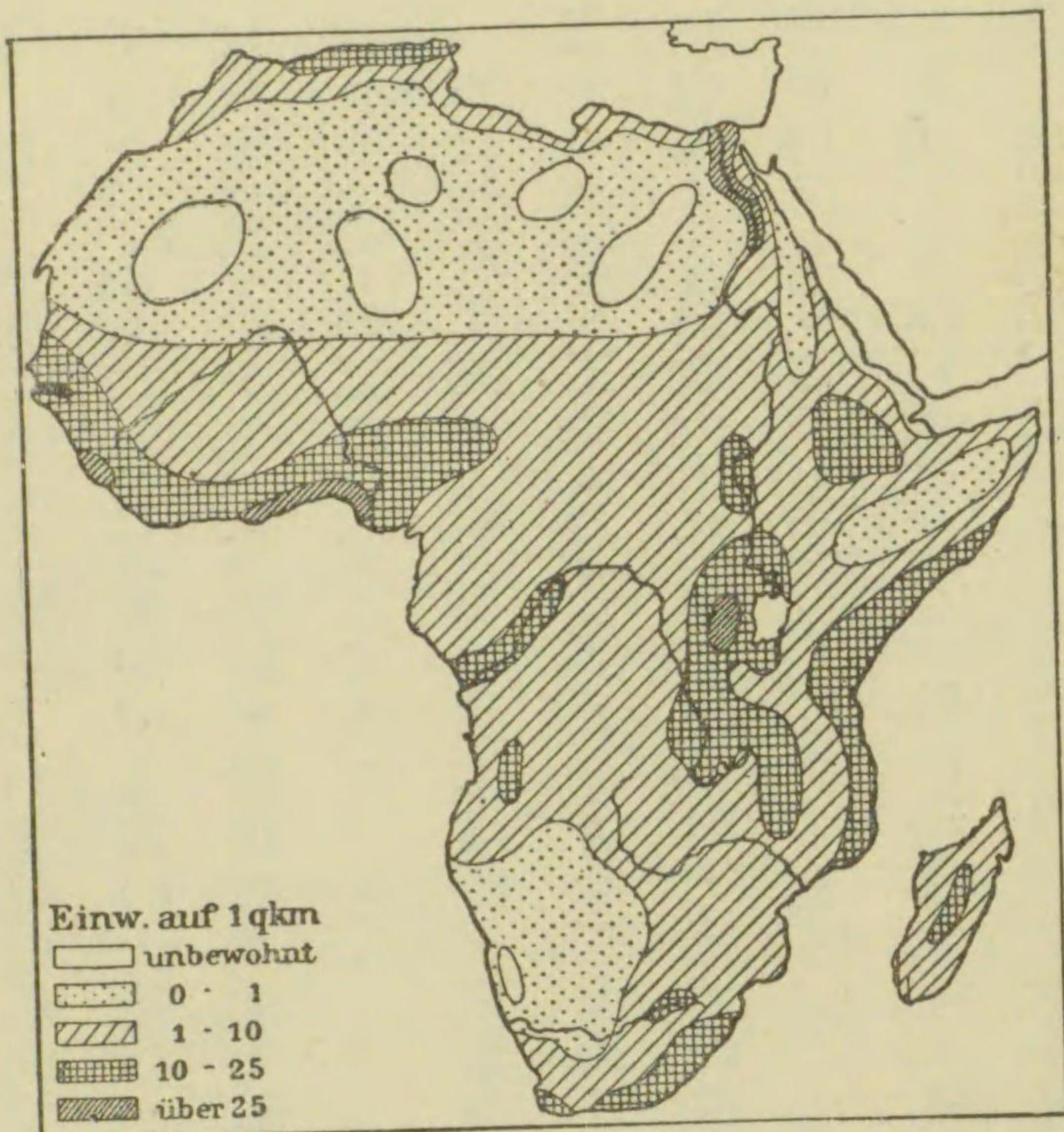


第121圖 南アメリカの人口密度

然し、敘述のごときは何れも工業の土地定着性を多分に保持してゐるものであるが、一般に地球上の工業は、土地定着性に關する法則の支配から解放されて行く傾向がある。この原因は、全く、法則の支配から解放されて行かうとする意志それ自體にあるのではなく、寧ろ、それは、發達し、移動して行く原料地域の分解によつて附與され

る強制力のなかに存してゐる。その結果、結局は、何れの場合に於ても、原料を外國から仰ぐこととなり、自國工業が外國に依存することになるのである。即ち、多くの工業は、政治上の種々な施設、例へば國境の移動などによつて、その原料飼育地を完全に沒收されることがある。

適切な實例は、洪牙利の木材工業で、世界大戰以前、同國の木材工業は、迅速且つ大規模に發達したが、戦後のトリアノン條約によつて同國は森林地域を失ひ、その結果として從來まで土



第122圖 アフリカの人口密度

地定着的に發達して來た森林工業は、自己の存在を維持するために、外國からの原料供給に依倚しなければならなくなつたのである。敘述によつて、地球上に於ける工業の分布に關して、尙、完全な觀念は得られないにしても、工業の發生と發達とを導く緒口と關係とは明確にされたわけである。

而して、地球上に於ける工業の大特徴は、その所要の原料を外國の供給に仰ぎ、従つて一般に外國の土地生産物に依存してゐるものであるが、それにも拘はらず、尙、その他にその本質上、地方的性質をもつて、地球上いたるところ同じ様な方法で發達した工業が存在してゐる。

石材工業は、疑もなく、石材の廉價なために今日でも尙、典型的な土地定着性の工業となつてゐる。従つて、砂利工業のごとき建築石材工業は、一般に原料分布地域の近くに發達してゐる。特に興味のあるのは、この土地定着性の工業が、住民の職業構成に影響を及ぼしてゐることである。とくに石材工業が、人口の大部分に、労働とその生活手段とを附與してゐる様な地方に於ては、かかる工業の職業構成に及ぼす影響は明かに看取さるる。その典型的な例證は、獨逸シレジアの工業が示してゐる。

更に複合工業のうちから、工業の土地定着性に對する典型的實例を示現するものとして、石炭からの派生工業 (Derivateindustrie) を擧げることが出来る。タールを産出する工業及びそれに由來する無数の工業——化學的・技術的基礎の上に立つもの——は、更に、はるかに、土地定着的であることを示してゐる。

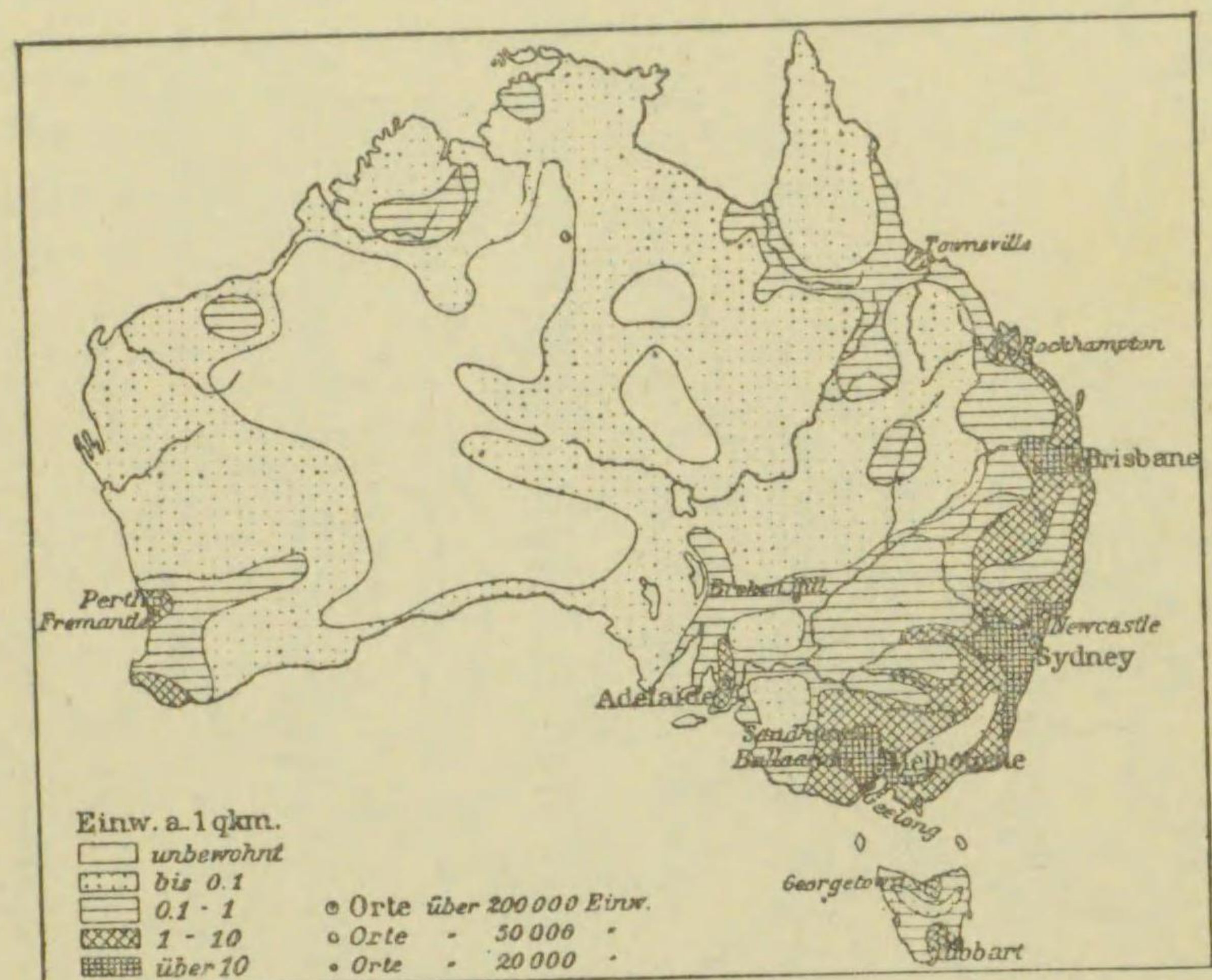
敘述して茲に至れば、一般に地球上の工業地帯と解して差支へないところの現在の工業分布は、本質的に、地球の工業化の程度を示す尺度であると見ることが出来る。而かも、この地球工業化の様相は、工業に於ける最高度の經濟凝集を示現し、同時に、工業發達地帯と非發達地帯との間の對立關係に對する明確な觀念を與へるものである。

また、ある場合には、工業の邊境地域は、工業の核心地域との交錯——現在並に未來に於ける——を示現してゐることもある。即ち、工業の中心地から出發し、現在射出狀に走つて、而かも明日の工業地域を指示してゐる様な工業の勢力線 (Kraftlinien) があるのである。

こゝに於て、我々は敘述の考察を次のごとく總括することが出来る。

(一) 工業の分布は、地球上に於て地帶的性質をもつてゐる。

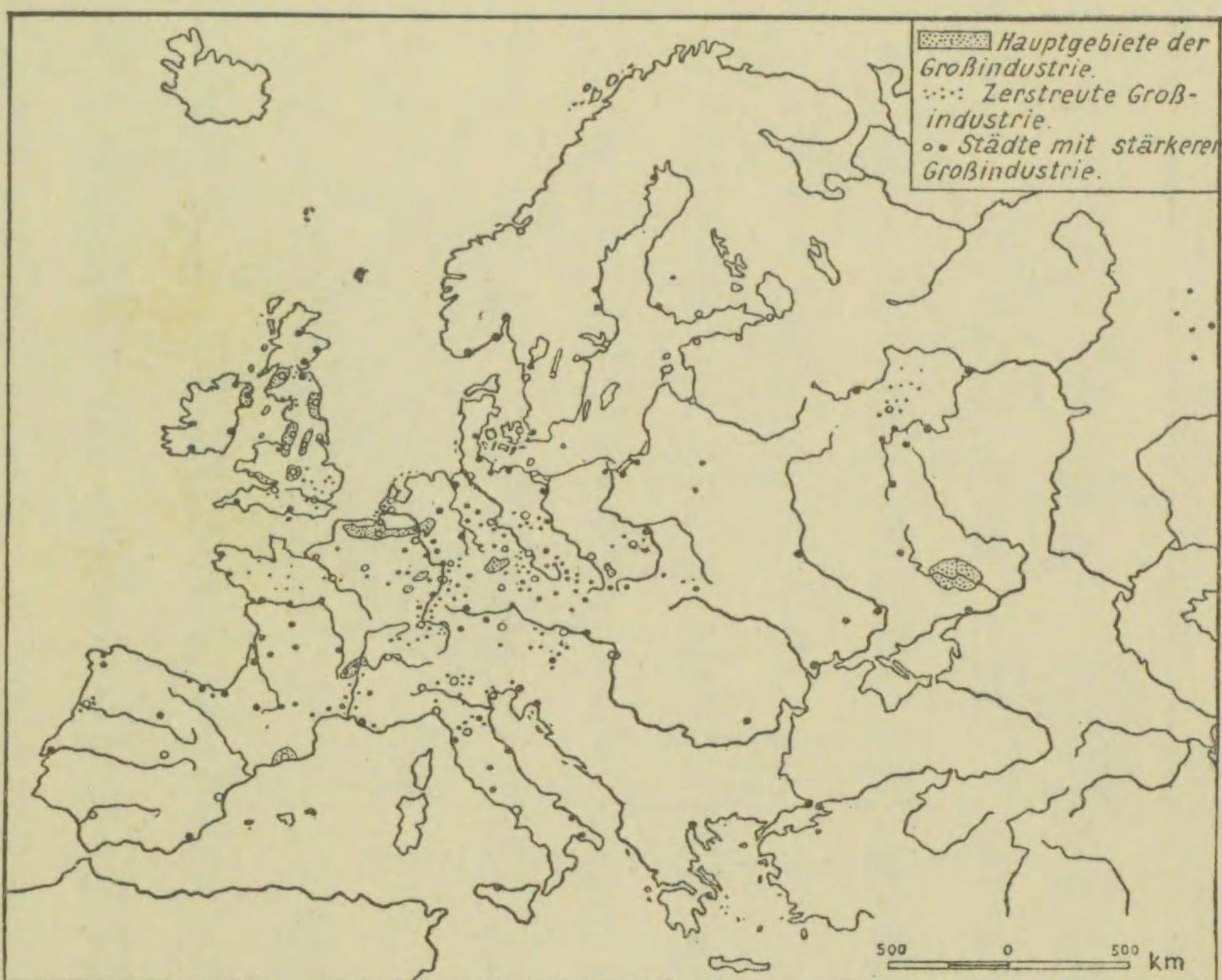
(二) 工業地帯は、人口稠密帯と一致する。それは、ジョージ (Joyce) の所謂、「歐羅巴の數百萬人は、工業制度の結果として生存してゐるので、若しこの工業制度が崩潰すれば、數百萬人は滅するだらう」といふところから見ても如何に工業と人口密度とが



第123圖 オーストラリアの人口密度

不可分な關係にあるかが察知せらるゝだらうし、また、パルプ工場の建設が、多數の入移民を

促した樺太の人口分布圖をみても、如何に「人口密集地がバルプ工場と全然一致してゐる」か



第124圖 歐羅巴の工業地帯と工業都市

が知らるゝであらう。

(三) 重工業は、動力材の安價に得らるゝところに定着する。

(四) 交通位置が工業定着性を決定する。

(五) 經濟上の妨害要素(工場新設の巨費など)が工業の移動を妨げて定着を促す。

(六) 政治的要素(國境の變化など)が工業のアルタルキーを破壊して依存性を附與する。

(七) 派生工業(タール工業など)がより強い定着性を有する。

(八) 自然的條件が工業の絶對的定着性^(三)

を決定する。例へば、清水は人絹及び染物工業を、河川は製材工業を、河海は造船工業を各々決定し、更に水質及び水量は、飲料工業(銚子の醤油、灘の清酒、首里の泡盛)を制約する。

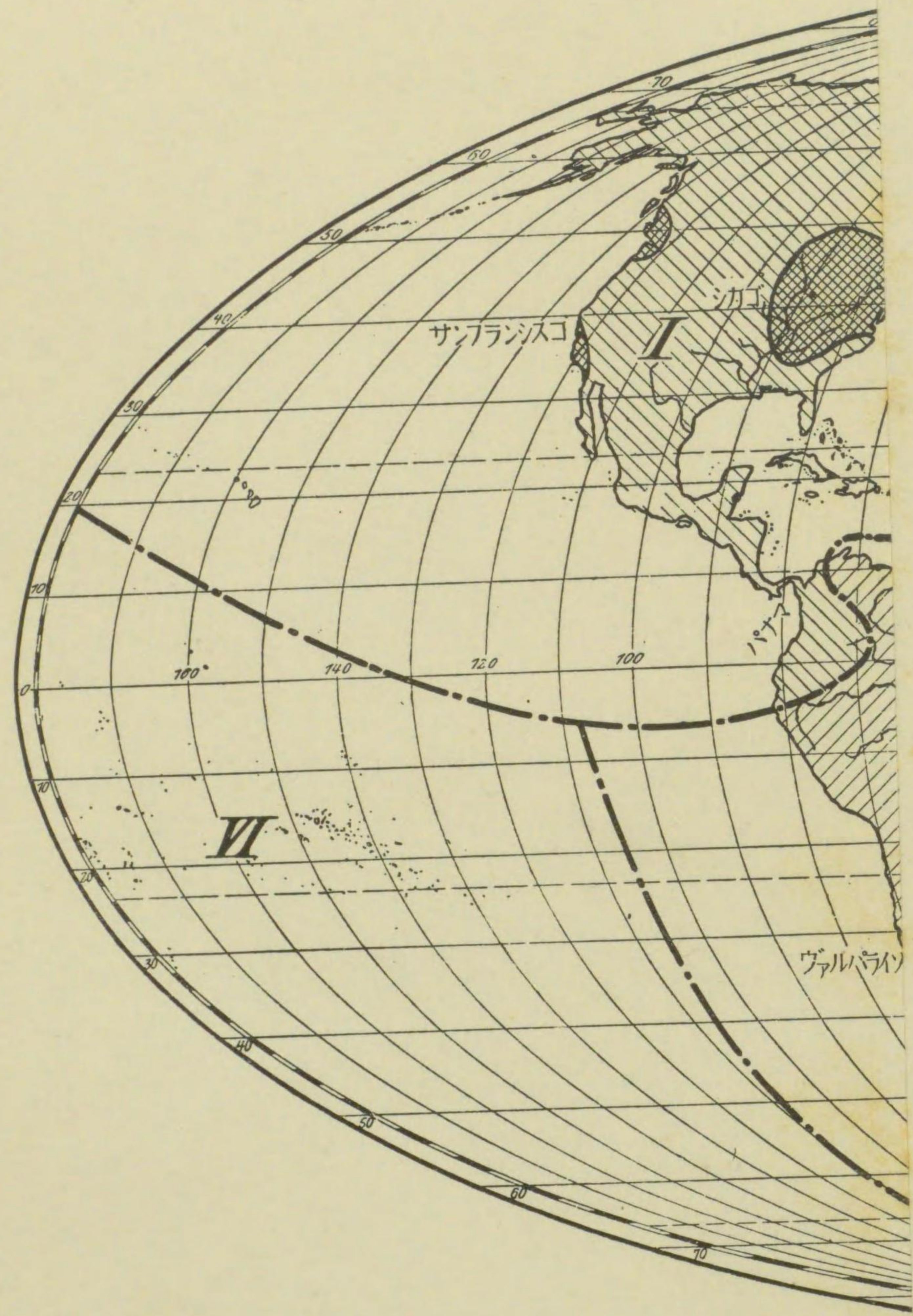
(九) 「輕量で價値の大きい製品を出す工業は、原料品を出す地方からの巨離などよりも、勞働力の供給や市場への巨離などに支配される」^(四)

かくのごとく、地球上に於けるあらゆる工業は、人爲的或は自然的要因によつて絶へず變化する有機體——活力ある生活體とみることが出来る。従つて、そこには、工業の死滅帯、生活帯、未來帯がある。が、工業に關して、如何なる範圍まで地理學はその手足をのばすか。即ち工業の經濟地理學的考察の限度如何の問題は、原料品と製造品との間の關連が、空間のなかに於て完成されると云ふことに依つて明かに解決されることが出来る。即ち、その變化の外部的表現は、自然景觀より文化景觀への推移、この場合に於ては、工業景觀(Industriellandschaft)への變移のなかに存してゐるのである。

註一 H. G. Dimeen: Race and Population Problems, New York 1929, p. 358. 三九頁

註二 武見芳二 樺太入移民の經濟地理學的考察 地理學評論 大正十四年十月 三八一—三八五頁

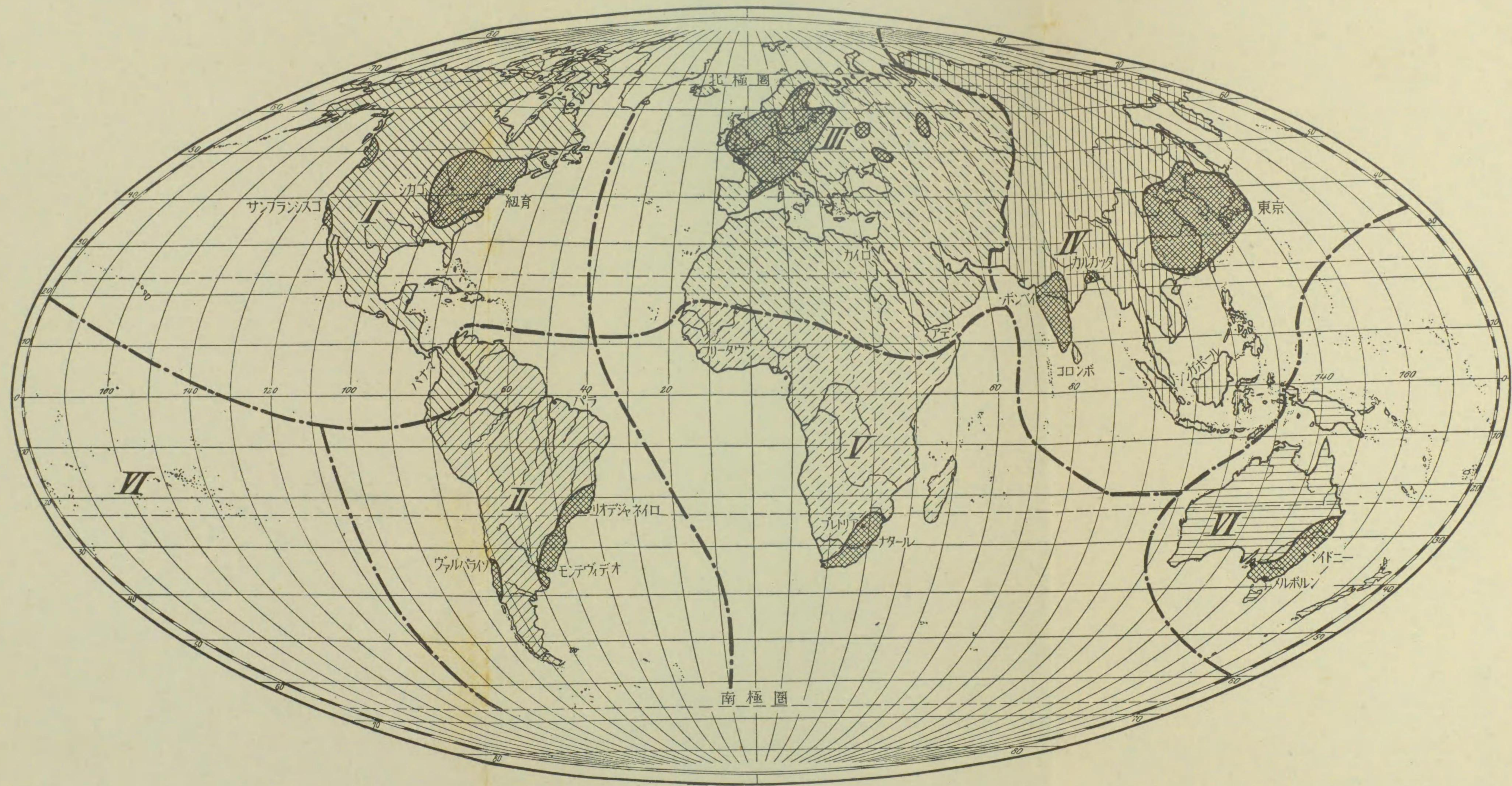
註三 武見芳二 大東京地域の工場分布 山崎直方博士記念論文集 地理學評論 昭和五年七月 三八九



- I 北アメリカ経済圏 (紐育・シカゴ)
- II 南アメリカ経済圏 (リオデジャネイロ)
- III 歐羅巴・近東経済圏 (西北・中東)

註四 今村學郎 前掲 一六五頁

經濟地理學概論



第 125 圖 世界の経済圏と工業地帯

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| I 北アメリカ経済圏 (紐育・シカゴ工業地帯) | IV アジア経済圏 (東京・ハルビン・香港工業地帯と印度工業地帯) |
| II 南アメリカ経済圏 (リオデジャネイロ・アエノスアイレス工業地帯) | V 中央・南アフリカ経済圏 (プレトリア・ケイプタウン工業地帯) |
| III 歐羅巴・近東経済圏 (西北・中央歐羅巴工業地帯) | VI 大洋洲経済圏 (アリスベーン・シドニー・アデレード工業地帯) |

第三章 自然的・人爲的經濟空間

地帶的に表現されてゐる地球上の經濟效果に對する空間的分類は、土地性質及び氣候などの主要要素により、或は現經濟人の分布及びその精神的特質などによつて特徴づけられてゐる。然し、これらのものは、實際に於ては、經濟機構の特徵的基礎を把握する補助手段たるにすぎないのである。爾來、經濟それ自體は——それが空間的に認識することが出来るやうに——經濟事象の多様性を包括するもので、従つて、それは經濟單位か或は經濟空間に分類される。この空間の中に於て、經濟生活の多現象の複雑性から確たる特徴事象を引き出すことが出来る。かかる方法に於て、あらゆる經濟空間は、經濟的優越性 (*Wirtschaftliche Dominanten*) ——それは精神文化的領域にある場合もあれば、また物質的領域に横つてゐる場合もある——ごとき優越性をもつてゐる。例へば確たる特異性をもつてゐる農業地域或は特別な土地栽培を行つてゐる植民地域は、丁度、工業地域か、或は都市景觀 (*Stadthandschaft*) かが、特種的經濟空間をなしてゐると同様に、一つの特別化の經濟空間をなしてゐる。

然し、どこまでが優越的經濟空間であるか、即ち、特別化經濟空間の限度如何の問題は、ここに鋭敏な境界線を確定することは困難である。兩者の漸移過程は、寧ろ、地理的な地帶的なもので、線的性質のものではない。即ち、自然的經濟空間の核心地域で強烈な特質を示現してゐる經濟的優越性が、段々、薄弱になつて行く様な所か、又は、二つ或はそれ以上の地域が、經濟的に相互に混合し合つてゐる所かに於て、我々は優越空間と非優越空間とに對する境界帶の存在を認むることが出来る。

而して、かかる場合、經濟空間と居住空間とは常に相一致し、掩被するものとは限らず、寧ろ、自然的經濟空間の多くの主要構成部分は、相互から遠く分散されて居り、總てが必ずしも、同時に人間の居住空間となつてゐないのである。

こゝに於て、原則として、自然的經濟空間に對しては、政治的境界、即ち國家的境界も地方自治體の境界も存在しないのである。かくして、經濟的市場圏の圓周は、かかる限界を越へて存立してゐる。例へば、北アメリカに於ける石油經濟の地域、或は、材木及び穀物經濟の地域は、關稅境界及び土地境界を越えてゐるところの經濟的市場圏をなしてゐる。これと同じ理由から、かかる市場圏は、内陸湖、内海、大河川に於ても成立して居るので、この場合の市場圏

も、政治的所屬からは全く獨立してゐる所の總ての經濟的集團から形成されてゐる。獨逸の東海經濟及び本邦の瀬戸内海經濟は、内海市場圏の例證で、これらは經濟的に包括された市場圏の形成に重大な影響を與へてゐるものである。

また、これと同様にして、國家的に限界された空間も、亦一つの自然的經濟單位を形成することがある。即ち、政治的・社會的特徴によつて及び國家經濟の特質によつて、一つの經濟的個體 (wirtschaftliches Individuum) にまで發展する自然的經濟單位を形成してゐる。而かも、その個體は、外部に對しては封鎖的に作用するもので、我々はそれを自然的經濟單位として表象することが出来る。

特に輓近に於て、生活に必要な工業の原料品及び製精品に對して、Pakt 或はTrust (例へば歐羅巴鐵パクト、アメリカ鋼鐵組合) がつくられてゐるのであるが、その組合は、一應は、人爲的に契約、條約によつて共成された個體經濟——即ち、それは封鎖的に經濟的登上 (Aufstehen) を目的とし、また單位的經濟外觀を目的とする——個體經濟の多様性であるにすぎない。それ故に、確たる經濟部門に對して、土地の廣大な空間を越えて、又は境界標を越えて、一單位が作出される。この確立經濟部門に關して、パクト或は組合地域が本質的にその周圍から區別され

る。が、それは經濟空間の自然的單位の理念をある特別な場合に應用したにすぎぬ。かかる組合などの軌近の發達から離れても、多くの自然的經濟空間に對して、その經濟空間が、經濟的優越性から相互に區別されてゐると云ふことは認めらるゝのである。

かくのごとくして、都市經濟、土地經濟或は農業經濟及び工業經濟をもつて經濟的に一方的に形成された空間は、その各々の對照に於て、優越性の完成を示す所の極端な形式それ自體であるが、また一方的經濟構成の他の對照は、氣候的に分化された母國と植民地との間に於ける經濟空間の形式に認めらるゝ。即ち、新植民地生産物と舊植地生産物とは、一方的に分散された經濟空間——勿論、それは自ら自然的經濟空間である——を表示してゐるのである。

かくして經濟構成の多様性か、或は一方性の中に、アルタルキーの問題が横たはつてゐる。即ち、自然的にして、而かも複雑した經濟空間の中に於て、需要と供給とが統制され得るところに、アルタルキー、即ち、自己支給 (Selbstversorgung) の状態が存在してゐる。が、この自給自足は、實際的には地球上どこにも存在してゐない。のみならず、經濟構成は、自然的に、また國家的に限界された經濟空間に於ては、實に不完全なものである。そこで、農業生産と工業生産との間に保持されてゐる均衡状態を示す自給自足の方程式は、單に理論的試みにみぎな

いことになるが、假りに、その式を示せば次のごとくなる。

$$\begin{array}{l} \text{農業生産} = \text{工業生産} \\ \text{Agrarproduktion} = \text{Industrieproduktion} \\ A = I \end{array}$$

然し、この均衡状態は、食料生産と工業生産とが均衡を保つところに於てのみ、特に低級文化の民族に於てのみ見らるゝにすぎない。而して右の式に於て、AがIより大であれば、そこに必然的に地球の穀倉が成立し、若し、IがAより大であれば、そこに極端な工業地方が展開される。又、もし牧畜生産 (Viehzuchtproduktion) が、A+Iよりも大であれば、我々はそこに、一方的に發達する牧畜地方を指摘することが出来る。

以上總てのものは、地球空間が、分化された經濟構成をなしてゐる事實を物語るもので、この事實が、二或はそれ以上の異つて形成された地球空間の間に、緊張をつくるのである。かくしてこの經濟緊張 (Wirtschaftsspannungen) は、只、經濟交換によつてのみ解決されるのである。而かも、この經濟緊張を平均させ、これに調和を求めようとするには、簡單なる意志行爲だけでは行はれぬ。それは、あらゆる生産物に對しては、交換に於て輸送の収益性問題のうち

に、常に障害が存してゐるからである。即ち、あらゆる生産物に對しては、越えることの出来ない經濟的収益限界があるのである。

更に換言すれば、經濟緊張の完全なる平均化は、單にそれに相應する完全なる空間克服に於てのみ可能であつて、輸送の時間或は輸送距離は、腐敗し易き生産物の多量の交換に對し、又は、安價な量的原料品の多量の交換に對して、繼續的な障害となるものである。それ故に、緊張の問題は、經濟的収益限界内に於て、空間克服をなす技術的手段が存在しない限りは、解決されない。勿論、その經濟交換の實際的目的及びアウトタルキーの理論的目的は、衣食住に關する人間の完全なる欲望充足にあることは云ふまでもないが、この充足に關係してゐるところの經濟的緊張問題の完全なる解決は、空間克服に對する手段を征服するにある。が、往々にして、手段の不足によつて解決されぬことがある。かかる場合に於ては、相互の緊張地域に於て、より近い經濟空間が、經濟的に有利であることは云ふまでもないところである。

第四章 經濟的ドミナンテン

經濟的ドミナンテンとは如何なるものであらうか。如何にして構成され、また如何に分布してゐるものであらうか。

既に前章に於て、自然と人間、否、經濟空間と現經濟人との對立的相互關係から、一方が他方に、他方が一方に及ぼす作用の結果として、地球上にはあらゆる種類の經濟階梯と經濟形態とが構成されたことは、既に論述したところである。即ち、土地構造の不平等なる分割、鑛産の不均一なる分布、氣候の不安定なる束縛性(二二六圖)などが、一方に存在し、他方には、地球上に於ける十八億の人間が、多様な文化意慾と經濟意慾とをもつて、これまた不均一に分布してゐるがために、地球上には各種多様な經濟效果が作出されたのである。而かも、現經濟人は、自然的空間が與へうる限界内に於て、文化經濟意慾の函數(二二四)に従つて、能動的に自然に働き掛け、一方、自然はその函數に應じて、自らが秘藏する一切の財寶を人間に附與する。人間が自己に與へられた自然的空間内に於て、自然から所與物を引き出すところに、特異なる

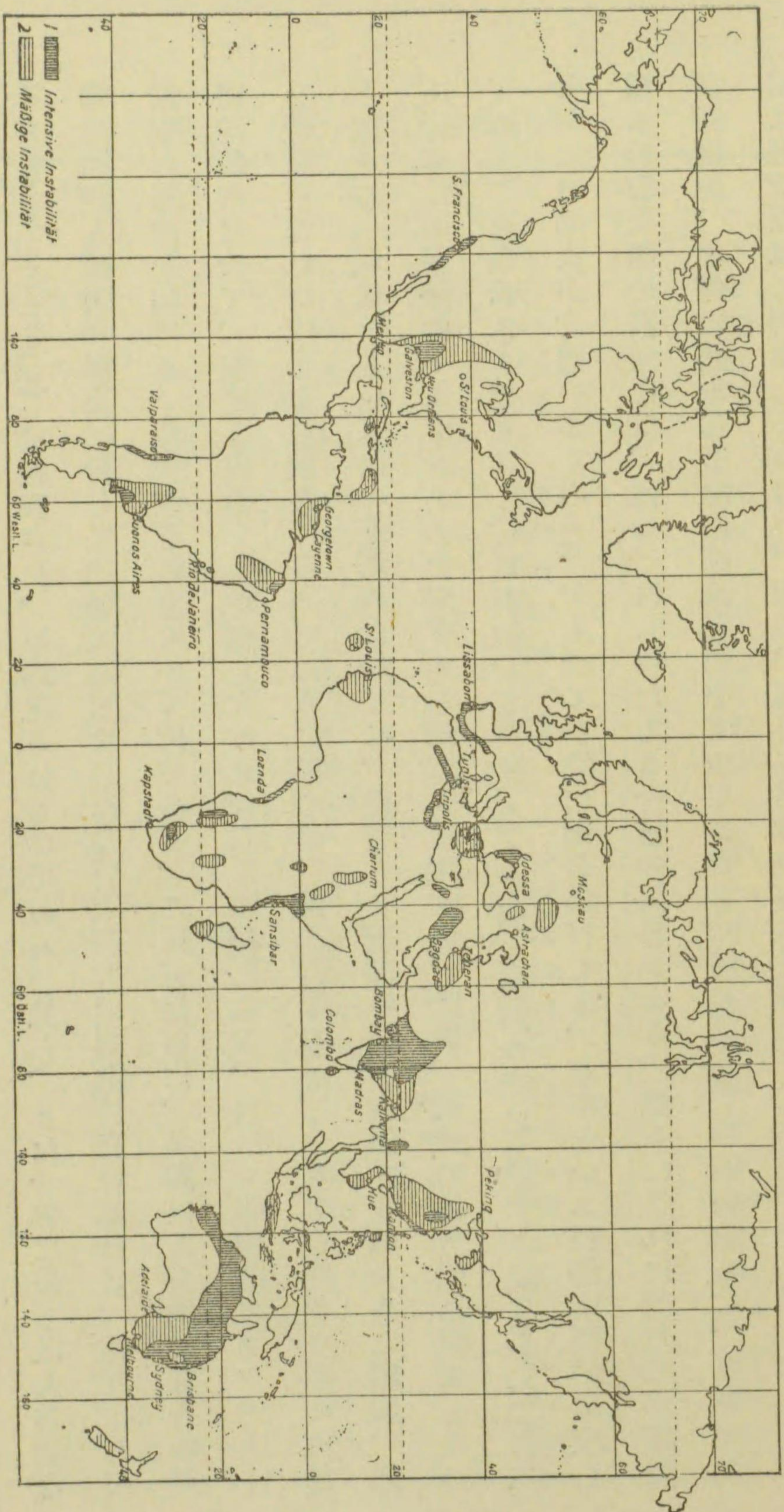
經濟空間が示現され、獨特な經濟形態が作出される。と、同時に廣義の自然的基礎(NG)とFKとの結合が、茲に經濟的ドミナントン(WD)を構成するのである。

$$WD = FK \times WIM \times NG$$

かくして構成された經濟的ドミナントン、即ち絶對的に經濟的優越性をもつ原料素材は、地方的に分化されるもので、この分散的・獨立化の經濟的ドミナントンが、地方と地方との間に、否、世界に於ける相互の經濟空間の間に、經濟緊張(Wirtschaftsspannungen)を惹起せしむるのである。而かも、この經濟緊張が、更に必然的に經濟交換を促し、こゝに財貨の流動が、一方から他方への經濟空間に始まるのである。従つて、また茲に交通現象が生じてくる。即ち、經濟緊張は、交通を手段とする經濟交換によつてのみ解決されることが出来るのである。

更に、また交通を手段とする限りに於て、且つ交換がある利潤を目的とする限りに於て、交通は空間(距離及び高度などの文明に對する自然の妨害要素)を抑壓しなければならぬ。従つて、こゝにまた、空間克服の問題が起つてくる。即ち、ドミナントンの緊張性と經濟交換と並びに空間の克服性と世界交通とは、相互に強く密接に結合してゐる。

茲に於て、空間克服の世界經濟は、現經濟人に負されたFKによる經濟的ドミナントンの總



第 126 圖 溫熱地方の乾燥によつて生ずる經濟上の不安定地域
1. 大不安定地域 2. 不安定地域

和によつて構成され、これが經濟の統制運行は、收益限界内に於て、交通手段による緊張性の解決によつて行はれるものである。かくしてこそ、經濟的ドミナントンの獨占的支配 (monopolistische Kontrolle) は緩和され、平均化されるのである。然し、また一方に於ては人爲的な關稅問題も緊張の解決に對しては等閑に附せられない。即ち、關稅の高い障壁は、往々にして緊張の解決を妨げる。現代がその最も、例である。これがために、各國は人爲的に自らの經濟空間内に於て、需要と供給とを統制しなければならぬ様になり、曰はゞ強制的アウトタルキを體驗しなければならぬ状態になつてゐる。従つて、鐵・石炭・石油……などを物質文明の基礎と認める「現代」といふ時の範圍内に於ては、豊富なる經濟空間を占領する地方或は國家、即ち、多くの經濟的ドミナントンを所有する地方或は國家が、所謂、富強の地方或は國家となつてゐることは云ふまでもなく、日本のごときは、全く貧弱な經濟空間に占居してゐるがために、如何に日本人が、強い多くの「力」をもつて自然に働き掛けても、日本といふ經濟空間が示現し得る物質文明の高度には、運命づけられたある一定の限界がある。然るにこれに對して支那及び印度が、如何に豊かな資源の經濟空間をもつてゐても、民族の「力」の弱いために、今日、文明は高度領域に到達してゐない。即ち、文明に關聯のある經濟的ドミナントンは、自然の財貨

經濟的ドミナントンとその指導地方

生産物	生産地方	世界生産に對する%	年
硝	チレ	100.0	1928
マニラ大	フィリッピン	100.0	1928
黄麻	印度	98.9	1927
亞鉛	米國	92.4	1926
白	コロンビア及ロシア (コロンビア46.3%)	91.2	1925
ニッケル	カナダ	85.9	1928
蘭	日本	84.2	1927
水銀	伊太利及スペイン	81.7	1928
加	獨逸	79.7	1928
アスベスト	カナダ	79.6	1927
褐炭	獨逸	76.4	1927
石油	米國	71.8	1927
銀	メキシコ及米國 (メキシコ44.4%)	68.1	1927
珈琲	ブラジル	64.2	1927
アンチモニー	支那	62.0	1924
錫	マライ半島及蘭印	61.5	1928
米	印度	61.4	1928
棉	米國	60.3	1928
カカオ	英國の支配下	59.7	1924
亞大麻	ロシア	58.4	1927
大茶	ロシア	56.6	1927
銅	支那	55.3	1927
ゴ	米國	54.0	1927
金	英領	53.3	1927
ダイヤモンド	トランスヴァール	51.7	1927
石	南阿聯邦	48.2	1927
銑	米國	45.7	1927
羊	米國	43.8	1927
	濠洲	30.8	1927

と人間の「力」とを同權的に、同值的に要求するものである。

故に多くの經濟的ドミナンテンを獨占せんとするならば、強い「力」を把握して、同時に豊かな自然的附與の上に立たなければならぬ。のみならず、自然が現經濟人に附與する經濟的斜角、經濟的缺除要素、經濟的遠隔性、經濟的封鎖性などに關しても有利な條件をもち、また鬭争・周縁・交通・保護的位置によつて構成さるゝ文化的斜角——現經濟人を高級文化へ導く手段としての——に對しても有利でなければならぬ。かかる有利なる一切の自然的要素と「力」とが結合して調和するところに於てのみ、經濟的ドミナンテンの成立があり、而してドミナンテンの多數をもつ地方が、「富強地方」たり得ると假定する限りに於て、こゝに所謂、「時代の強國」が生じ、同時に、「時代の弱國」が生ずることになる。即ち、國家の興亡と云ひ、民族の衰頹と云ふも、それは畢竟するに經濟空間或は環境の一地區から他の地區への移動にすぎぬ。近東より地中海、西歐羅巴、中央歐羅巴、北アメリカへ至る世界文明の核心地の移動は、要するに「力」を負された經濟空間の移動にすぎぬ。即ち、文明は、活力ある有機體、生き／＼した生命體と見らるべく、遊牧民族がオアシスを追つて生活してゆくと同じく、「文明」も亦地球上の住みよき場所を選択しつゝ、點々として歩いてゐるのである。そして、今や現代の物質文明は新大陸の

多くの經濟的ドミナンテンに充滿された經濟空間に定着しようとしてゐる。一時的に。勿論、それも次の定着地を發見するまでの單なる瞬間的土地定着にすぎないのであるが。

かくして、「力」は經濟的ドミナンテンと共に永久に流れ、文明の核心地域は永遠に移動する。

第四編 参考文献

本書に引用したる参考文献は左の如くである

- W. GÖTZ : Lehrbuch der wirtschaftlichen Geographie für Handels-, Real- und Gewerbeschulen. Stuttgart 1891.
- _____ : Die Aufgaben der „ wirtschaftlichen Geographie “ („ Handelsgeographie “). Ztschr. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin 1882.
- A. KRAUS : Versuch einer Geschichte der Handels- und Wirtschaftsgeographie. Frankfurt a/M 1905.
- F. BANSE : Landschaft und Seele. München 1928.
- R. LÜTGENS : Allgemeine Wirtschaftsgeographie. Breslau 1928.
- _____ : Spezielle Wirtschaftsgeographie auf landschaftskundlicher Grundlage. Mitt. d. Geogr. Ges. in Hamburg, Bd. XXXIII, 1921.
- K. SAPPER : Allgemeine Wirtschafts- und Verkehrsgeographie. Berlin 1930.
- B. DIETRICH : Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie. Breslau 1927.

- B. DIETRICH: Neue Strömungen in der Geographie, insbesondere in den Vereinigten Staaten von Nordamerika. Geogr. Anzeiger, Jahrg. 25, 1924.
- E. SCHEU: Deutschlands wirtschaftsgeographische Harmonie. Breslau 1924.
- : Der Einfluss der Raumes auf die Güterverteilung. Mitt. d. Vereins d. Geogr. a. d. Univ. Leipzig, VII, 1927.
- A. PENCK: Das Hauptproblem der physischen Anthropogeographie. Ztschr. f. Geopolitik, H. 5, 1925.
- R. REINHARD: Über Wesen und Wert der Wirtschaftsgeographie. Mitt. d. Verlagsbuchhandlungen. Breslau 1924.
- : Weltwirtschaftliche und politische Erdkunde. Breslau 1925.
- C. J. HOFFER: Notwendigkeit der Wirtschaftsgeographie für den Landwirt und Agrarpolitiker. Berlin 1925.
- E. OBST: Die Wirtschaftreiche in Vergangenheit und Zukunft. Eine Schicksalsfrage der deutschen Wirtschaft. Hannover 1922.
- E. FRIEDRICH: Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie. Berlin 1926.
- : Der Einfluss des Klimas auf die anthropogeographischen Verhältnisse Chiles. Mitt. d. Ges. f. Erdk. zu Leipzig, Leipzig 1917.
- : Einige kartographische Aufgaben in der Wirtschaftsgeographie. Verhandlungen d. 14 deutschen Geographentages zu Köln. Berlin 1930.
- A. SUPAN: Archiv für Wirtschaftsgeographie. Ergänzungsheft Nr. 84, Pet. Mitt. Gotha: Justus Perthes 1886.
- : Leitlinien der allgemeinen politischen Geographie. Berlin 1922.
- A. LEUTENEGER: Begriff, Stellung und Einteilung der Geographie. Gotha: Justus Perthes 1922.
- R. H. WITTEBECK: A Science of Geonomics. Ann. Ass. Amer. Geogr. 16, 1926.
- K. A. WITTFOGEL: Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus. Unter d. Banner d. Marxismus. Heft 3, Jahrg. 3, 1929.
- P. H. SCHMIDT: Wirtschaftsforschung und Geographie. Jena 1925.
- A. v. HUMBOLDT: Versuch über den politischen Zustand des Königreichs Neu-Spanien.
- F. v. RICHTHOFEN: Vorlesungen über allgemeine Siedlungs- und Verkehrsgeographie. Berlin 1908.
- A. HAUSHOFER: Bemerkungen zum Problem der Bevölkerungsdichte auf der Erde. Ztschr. f. Geopolitik, Jahrg. 3, 1923.
- O. SCHÜTTER: Die Ziele der Geographie des Menschen. Berlin 1906.

- A. HETTNER: Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau 1927.
 _____: Der Gang der Kultur über die Erde. Berlin 1929.
 _____: Die Einheit der Geographie in Wissenschaft und Unterricht. Berlin 1919.
 _____: Die geographischen Bedingungen der menschlichen Wirtschaft. Grundriss der Sozialökonomik, II Abteilung, Tübingen 1923.
 _____: Das Wesen und die Methoden der Geographie. G. Z, Leipzig 1905.
 B. HARMS: Volkswirtschaft und Weltwirtschaft. Versuch der Begründung einer Weltwirtschaftslehre. Problem d. Weltwirtsch. Schriften d. Inst. f. Seeverkehr u. Weltwirtsch. a. d. Univ. Kiel. Jena 1912.
 H. BERNHARD: Die Agrargeographie als wissenschaftliche Disziplin. Pet. Mitt., Jahrg. 61, 1915.
 J. SÜLCH: Die Verknüpfung von Geographie und Gesellschaftskunde in England. Geogr. Ztschr. 36, 1930.
 K. DOVE: Über die Berührungspunkte sozialökonomischer und wirtschaftsgeographischer Betrachtungsweisen. Weltwirtsch. Archiv, H. 3, Kiel 1919.
 _____: Methodische Einführung in die allgemeine Wirtschaftsgeographie. Jena 1914.
 C. C. HUNTINGTON AND A. CARLSON: Environmental Basis of Social Geography. New York 1929.
 R. STEGER: Forschungsmethoden in der Wirtschaftsgeographie. Verhandlungen des 14 deutschen Geographentages zu Köln. Berlin 1903.
 A. RÜHL: Aufgaben und Stellung der Wirtschaftsgeographie. Ztschr. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin 1918.
 OSBANH-ECKARDT: Wirtschaftsgeographie und Wirtschaftskunde. Hannover 1929.
 L. C. BECK: Die Aufgaben der Geographie mit besonderer Berücksichtigung der Handelsgeographie. Stuttgart 1834.
 E. BANSE: Die Seele der Geographie. Hamburg 1924.
 O. MAULL: Zur Geographie der Kulturlandschaft. Freie Wege vergleichender Erdk. München 1925.
 R. L. SHERLOCK: The Influence of Man as an Agent in Geographic Change. The Geogr. Journ. Vol. LXXI, No. 4, 1923.
 G. P. MARSH: The Earth as Modified by Human Action. 1877.
 J. RITCHIE: The Influence of Man on Animal Life in Scotland. 8 Vol. Cantab. 1920.
 J. MOSCHELES: Das logische System der Geographie des Menschen. Mitt. d. G. Ges. in Wien. Nr. 5—6, 1926.
 _____: Wirtschaftsgeographie der Tschechoslowakischen Republik. Schriften f. Lehrertfortbildung, Nr. 29, Wien 1921.

- N. CREUTZBURG : Die Entwicklung des nordwestlichen Thüringer Waldes zur Kulturlandschaft. Freie Wege vergleichender Erdk. München 1925.
- W. VOIZ : Das Wesen der Geographie in Forschung und Darstellung. Schlesische Jahrbücher f. Geistes- und Naturwissenschaften. Jahrg. 1, Breslau 1923.
- F. RATZEL : Raum und Zeit in Geographie und Geologie. Leipzig 1907.
——— : Anthropogeographie. Stuttgart 1882.
- H. WAGNER : Lehrbuch der Geographie. Hannover 1908.
- H. HASSINGER : Einige Aufgaben geographischer Forschung und Lehre. Wien 1919.
- H. STEVEKING : Grundzüge der Wirtschaftslehre. Leipzig 1925.
- F. ZAHN : Die raumwissenschaftliche Verflechtung der deutschen Volkswirtschaft. Erde und Wirtschaft, H. 1, 1927.
- K. HASSERT : Wesen und Bildungswert der Wirtschaftsgeographie. Berlin 1919.
- J. PARTSCH : Die Nordpazifische Bahn. Die geographischen Bedingungen ihres Werdens und ihres Wirkens. Mitt. d. Ges. f. Erdk. zu Leipzig, München 1917.
——— : Geographie des Welthandels. Breslau 1927.
- J. F. HORRABIN : Grundriss der Wirtschaftsgeographie. Berlin 1926.
- H. G. WELLS : The Outline of History. London 1923.
- M. ECKERT : Meer und Weltwirtschaft. Weltpolitische Bücherei. Bd. 9, Berlin 1928.
- F. HAHN : Die Wirtschaftsformen der Erde. Pet. Mitt. 1892.
- H. SCHERRER : Die Kaffeewalorisation und Valorisationsversuche in anderen Welthandelsartikeln. Weltwirtsch. Archiv, H. 3, Kiel 1919.
- O. E. BAKER : The Potential Supply of Wheat. Economic Geogr. Vol. 1, 1925.
- C. R. BAILL : Wheat Production and Marketing. Yearbook, U. S. Dep. of Agriculture 1921.
- A. J. CLARK : The Durum Wheat. U. S. Dep. of Agriculture 1923.
- H. WORKING : Wheat Studies. Vol. 2, No. 7, 1926.
- E. RÜST : Warenkunde und Industriellehre. II Teil. Leipzig 1926.
- A. DEUTSCHLÄNDER u. W. KUNIS : Der Handel mit Getreide. Seine Einrichtungen u. Grundlagen in allen massgebenden Ländern der Erde. Leipzig 1906.
- G. G. CHISHOLM : Handbook of Commercial Geography. 1925.
- A. P. BRIGHAM : The Development of Wheat Culture in North America. Geogr. Journ. 35, 1909.
- P. H. WITTECK AND V. C. FINCH : Economic Geography. New York 1924.
- K. RITTER : Der Getreideverkehr der Welt vor und nach dem Kriege. Agrarpolitische Aufsätze und Vorträge, H. 2, Berlin 1926.
- S. PASSARGE : Die Erde und ihr Wirtschaftsleben. Hamburg 1926.

- : Die Grundlagen der Landschaftskunde. Vol. III, Hamburg 1919.
- K. ZETZSCHE : Einführung in die Wirtschaftsgeographie. Leipzig 1 26.
- A. ZADE : Der Hafer. Eine Monographie. Jena 1918.
- H. SCHUMACHER : Der Reis in der Weltwirtschaft. München 1917.
- H. WINKLER : Reis. Monographien zur Landwirtschaft warmer Länder. Hamburg 1926.
- БАСКМАНН : Der Reis. Geschichte, Kultur und geographische Verbreitung, seine Bedeutung für die Wirtschaft und den Handel. Beiheft 8, Tropenpflanzer 1912.
- M. J. CAPPIN : Correlation Within Pure Lines of Rice. Philippine Agricult. XII, 1923.
- E. B. COPELAND : Rice. London 1924.
- W. WAGNER : Die chinesische Landwirtschaft. Berlin 1926.
- H. CROHN : Der Mais in der Weltwirtschaft. Veröff. d. Inst. f. Meeresk. Berlin 1926.
- NICOLAI : Der Kaffee und seine Ersatzmittel. Berlin 1901.
- H. SCHIEMANN : Der Kaffeemarkt unter dem Einfluss des Krieges. Weltwirtsch. Archiv, XXII, 1925.
- FLACHSBARTH : Die Kaffeewalorisation. Berlin 1908.
- H. KURTH : Die Lage des Kaffeemarktes und die Kaffeewalorisation. Abh. d. staatswiss. Seminars zu Jena, 1909.
- КОРКЕ : Cacao. Haarlem 1917.
- F. ZELLER : Kakao. Monographien zur Landwirtschaft warmer Länder. Bd. 1, Hamburg 1925.
- P. TORGASHEFF : China as a Tea Producer. Shanghai 1926.
- L. W. WEDDGE : Über die Bodenpflege auf Teeplantagen des südasiatischen Anbaugebiets. Beihefte z. Tropenpflanzer, 1926.
- H. A. J. DUNCAN : First Year Cotton Spinning Course. London 1921.
- W. L. BAILS : Studies of Quality in Cotton. London 1928.
- W. H. JOHNSON : Cotton and its Production. London 1926.
- A. T. JOHN : The World's Cotton Crops. London 1924.
- J. S. M. WARD : Cotton and Wool. London 1921.
- J. R. SMITH : Industrial and Commercial Geography. London 1925.
- A. REICHWEIN : Der Kampf um Kautschuk (Amerikanisch-britischer Konflikt). Die Rohstoffwirtschaft der Erde. Jena 1928.
- P. G. WRIGHT : Sugar in Relation to the Tariff. New York 1924.
- E. O. V. LIPPMANN : Geschichte des Zuckers. Leipzig 1890.
- : Zur Geschichte der Rübe. Leopoldina, Berichte der kaiserlich deutschen Akademie der Naturforscher zu Halle. Bd. 1, Leipzig 1926.

- F. FRECH : Die Kohlenvorräte der Welt. Finanz- und Volkswirtschaftliche Zeitschriften, H. 43, Breslau 1917.
- W. T. THOM : Petroleum and Coal, the Keys to the Future. Princeton Univ. Press, 1929.
- H. R. MILL : The International Geography. London 1926.
- S. OSBORNE : The Problem of Upper Silesia. London 1921.
- A. A. SANTALOV AND L. SEGAL : Soviet Union Year-Book. London 1930.
- H. G. DUNCAN : Race and Population Problems. New York 1929.
- K. HASSACK : Warenkunde. Berlin 1922.
- ERDMANN-KÖNIG : Grundriss der allgemeinen Warenkunde, Leipzig 1921.
- V. PÖSCHL : Allgemeine Warenkunde. Stuttgart 1912.
- F. KRAUSE : Das Wirtschaftsleben der Völker. Breslau 1924.
- W. SCHMIDT : Geographie der Welthandelsgebiete. Breslau 1925.
- V. R. GARFAS : Petroleum Resources of the World. New York 1923.
- G. E. GRAF : Erdöl, Erdölkapitalismus und Erdölpolitik. Jena 1925
- H. SPETHMANN : Die Grosswirtschaft an der Ruhr. Breslau 1925.
- O. KENDE : Erde und Wirtschaft in Zahlen. Hamburg 1926.
- W. L. WOTYNSKY : Die Welt in Zahlen. Die Landwirtschaft, Drittes Buch, Berlin 1926.

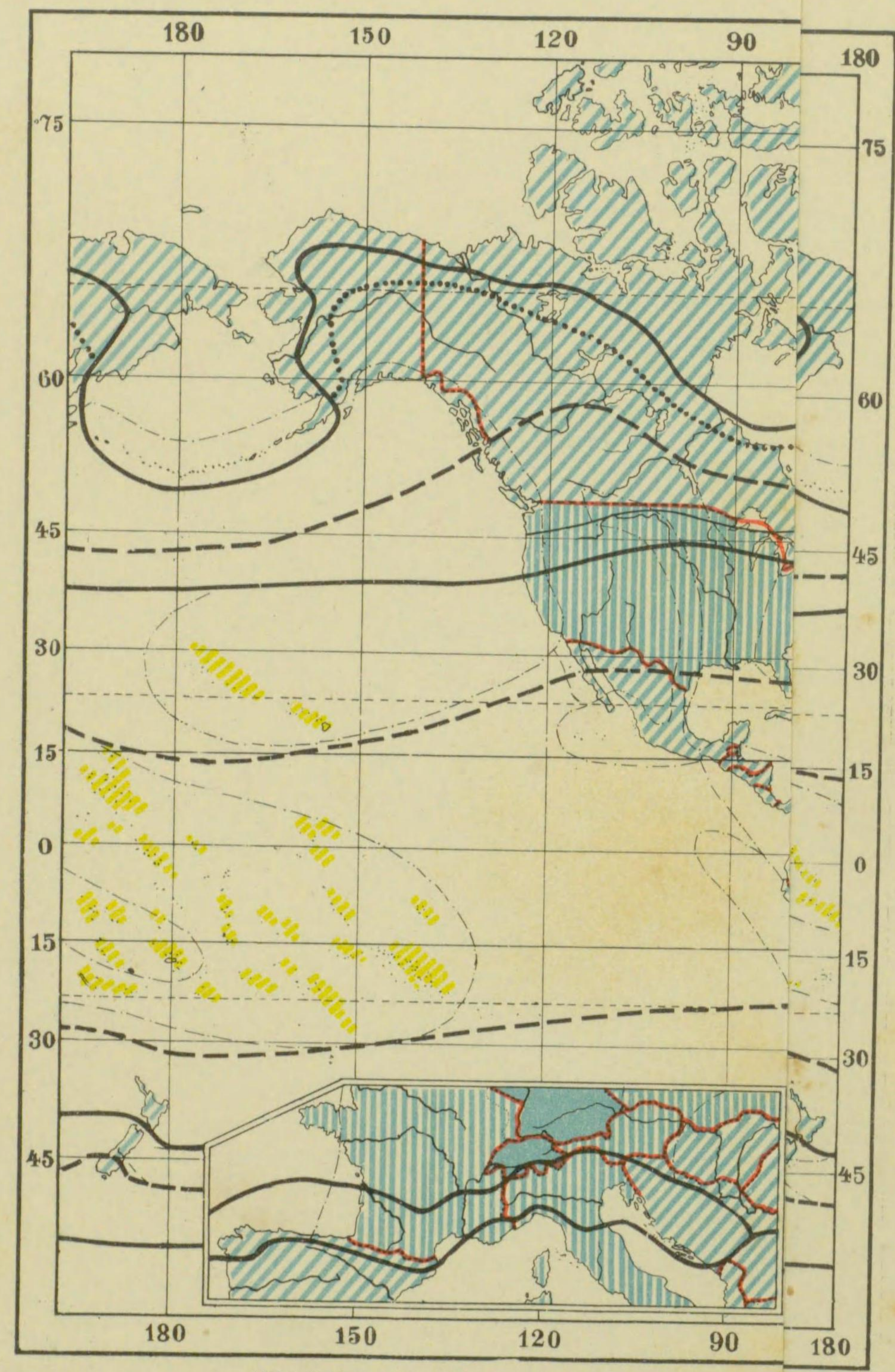
Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, herausgegeben vom Statistischen Reichsamt.
Jahrg. 48, Berlin 1929.

- 國松久彌 地理學の概念 昭和五年七月
- 東木龍七 地誌學的研究法に就いて 地理學評論 昭和五年七月
- 飯本信之 國家に對する自給自足の意義 政治地理學 昭和四年
- 佐藤弘 アウタルキー 政治經濟地理學 昭和三年
- ミリウの世界 經濟往來 昭和五年二月
- 交替作用の法則 地理學評論 昭和四年八月
- 世界經濟地理 昭和五年
- ウイトフォーゲル「風土政治學・地理的唯物論並にマルクス主義」思想 昭和五年九七號
- 坂田吉雄 農業地理研究法 地理教育 昭和五年九月
- 佐々木清治 地理學に於ける文化の意味 地理學評論 昭和五年四月
- 綿貫勇彦 人文地理學の特性 地理學評論 昭和五年七月
- 田中秀作 經濟地理學の本質及びその内容に就いての私見 地理教育 昭和四年十二月
- 伏見義夫 自然的環境と國民性 地理教育 昭和三年六月
- 保柳陸美 文化景觀の理論的研究 地理學評論 昭和四年十一月

- 小川 琢治 人文地理學研究 昭和三年
- 辻村 太郎 文化景觀の形態學 地理學評論 昭和五年七月
- ヨナソン著商品經濟地理 地理學評論 昭和五年六月
- 經濟生活の發達 地理學評論 昭和五年七月
- 田中館秀三 ジャバの經濟地理 地理教育 昭和四年六月
- 田中啓爾 中央日本に於ける高地の人文地誌學的研究概報 地理學評論 昭和五年八月
- 松尾俊郎 人文地理學 昭和四年
- 福井英一郎 我邦に於ける氣候分類に就きて 地理學評論 昭和三年九月
- 山崎直方 北海道の氣候學的研究 地理學評論 昭和四年九月
- 富田芳郎 ハンチントン著太平洋の西方 地理學評論 大正十五年
- 市川誠一 經濟地理學原論 昭和四年
- ラッセル海洋論 昭和五年
- 山岸忠夫 米國の地下水と灌溉 地理學評論 昭和五年七月
- 佐々木彦一郎 棉花の經濟地理的研究 地理學評論 昭和四年八月
- 原田準平 地理的に考察した本邦水力發電所の分布 地理學評論 大正十五年
- 松村 瞭 地名と人種名 地理學評論 昭和五年七月
- 河田四郎 經濟地域としてのセイロン 地理學評論 昭和五年四月

- 本庄榮次郎・黒正巖 日本經濟史 昭和五年
- 山 極二郎 大阪府下の灌溉農業 地理學評論 昭和三年十二月
- 石田龍次郎 隱岐島前の牧畑 地理學評論 昭和四年二月
- 牧野輝智 世界産業大觀 昭和四年
- 鐵道省運輸局 麥類及小麥粉に關する經濟調査 大正十五年
- 大豆・米・雜穀に關する調査 大正十五年
- 綿絲・棉花・麻苧類に關する調査 昭和二年
- 綿織物・毛織物に關する調査 昭和三年
- 石炭・骸炭・石油に關する調査 昭和二年
- 商品學講義 昭和三年
- 矢野恒太 日本國勢圖會 昭和四年
- 坂口武之助 本邦輸出入品詳解 大正十五年
- 河村信一 石炭 昭和三年
- 渡邊萬次郎 歐洲の主要炭田 地理教育 昭和五年三月
- 高橋純一 フランスに於ける石油問題 地理學評論 昭和元年
- 今村學郎 ジオノミックス 地理學評論 昭和二年
- 武見芳二 樺太入移民の經濟地理學的考察 地理學評論 大正十四年十月

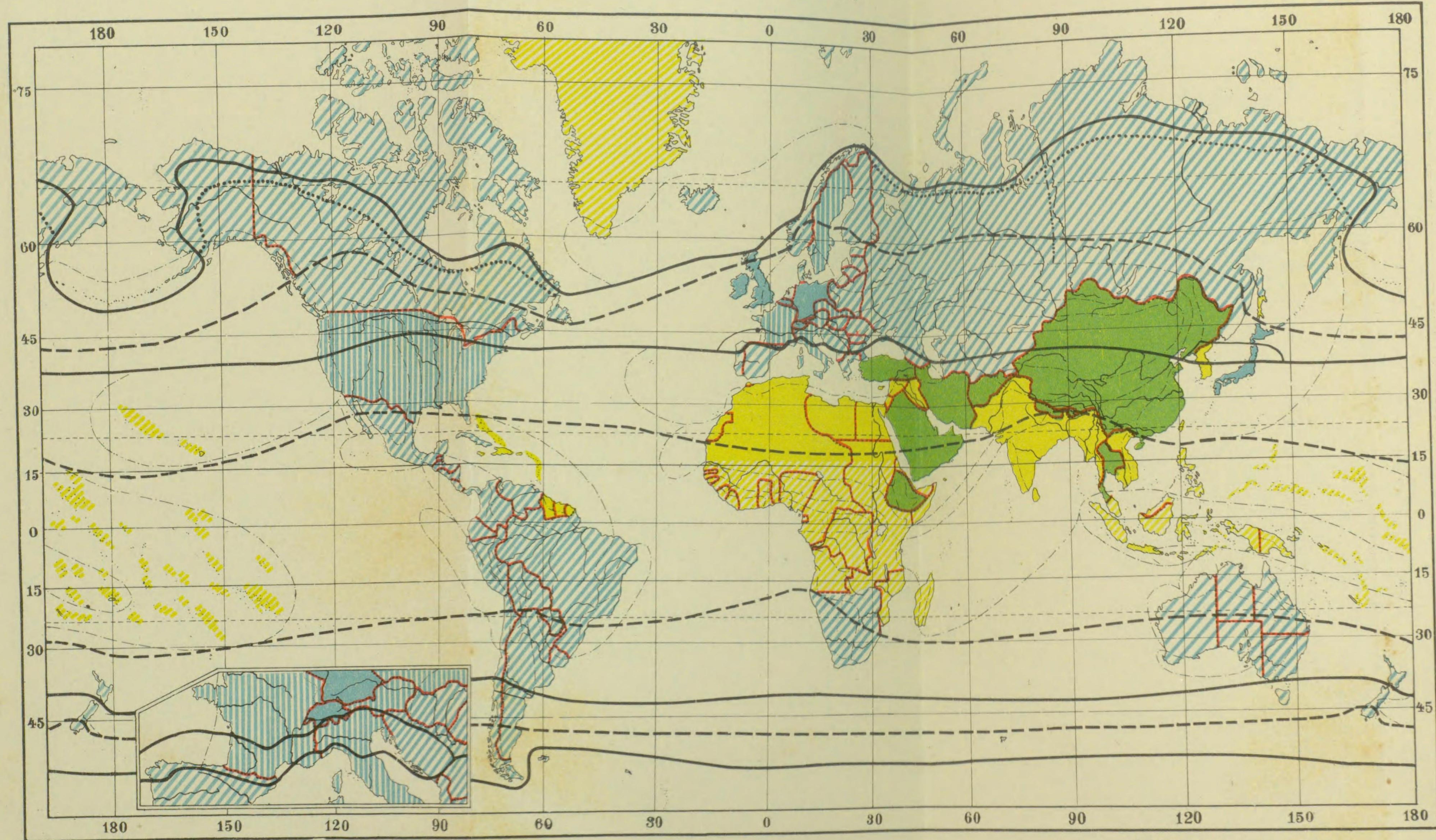
經濟地理學概論(終)



機械文明民族の獨立國
 工業國 原料工業國
 機械文明の原料國

武見芳二 經濟地理學概論
 大東京地域の工場分布 地理學評論 昭和五年七月
 横井時敬 比較農業 大正十五年

國家經濟群



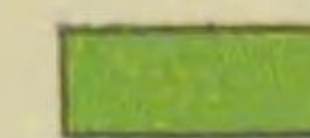
機械文明民族の獨立國

- 工業國
- 原料工業國
- 機械文明の原料國

機械文明民族の植民國

- 高度宗教の文化民族地帯
- 固有社會の自然民族地帯

非機械文明の獨立國



昭和五年十一月十五日印刷
昭和五年十一月十五日發行

經濟地理學概論
定價參圓五拾錢

版權

所有



著者

佐藤

弘

發行者

橋本

福松

印刷者

白井

赫太郎

東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地
東京市神田區錦町三丁目拾七番地

精興社印行

發行所

東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地

古今書院

振替東京三五三四〇番

